



特集

カナダ北西海岸先住民の アート、最前線

ユニークなカナダ先住民のアート 岸上 伸啓

トーテムポールは変わったのか 立川 陽仁

口承詩×マンガ 平野 智佳子

進化する版画 岸上 伸啓

線を彫る 伊藤 敦規

バスケットリー-2000年 齋藤 玲子



カリブーの頭を落とす

あかさか ともあき
赤坂友昭

北米アラスカ州の原野の真ん中にライムビレッジという村がある。先住の民タナイナの人々が暮らす小さな村。最も近い、といっても一〇〇キロほど離れた町から郵便と貨物を運ぶ小型飛行機が週に一便だけ飛んでいた。自給自足の暮らしを求めて旅をしていた私は、ある友人から紹介を受け、荷物がぎゅうぎゅうに詰め込まれた小型機の後部座席にもぐり込みライムビレッジへと向かった。一九九六年のことである。

当時の村の人口はおよそ三〇人。一日あればほぼ全ての村人と挨拶することができた。村人は学校の教師以外は全員が狩猟採集で暮らしていたので、薪集め、ボートの修理、魚の処理など、とにかく村人の手伝いをするところから付き合いをはじめた。そうして出会ったのが、ニックという狩人だった。老齢だが生年月日がわからず年齢は不詳。しかし、森に行くとき必ず獲物を仕留める狩の名人だった。そんなニックがカリブー猟と一緒に行くかと誘ってくれたので、二つ返事で随行した。カリブーが移動に使うようなルートを求めて、ボートで川を遡上する。歯がほとんどないせいか、普段は無口な彼だが狩猟にでかけると人が変わったように話しかけてくれた。彼の話は、いつも「Old people ……」からはじまった。ライムビレッジはどうやらカリブーの秋の移動ルートの中にあるらしく、昔から村の近くでカリブーを仕留めることができたのだという。そうはいつても、広大な原野のどこをカリブーが通るかはわからない。狩人の経験と直感に頼るしかない。それでもそのときの狩猟の旅では数頭のカリブーを仕留めることができた。

カリブーを仕留めた後、彼は必ず最初に頭を落とす。首のある箇所には小さなナイフを突き立てグツと力を込めると、ゴトリッと音を立てて頭部が地面に落ちた。毎回、その儀式を終えてから残された肉体の解体がはじまるのだが、ナイフ一本で黙々と解体していく彼の所作には無駄な動きがなく、まるで美しい舞を見ているようだった。夜、二人で焚き火を囲みながら頭を最初に落とす理由について尋ねてみた。私の問いに、そんなこともわからないのか、というように私を見てこう答えた。「カリブーの魂を天に還さなきゃならないからだ」魂が残っている間は、死んでもカリブーはまだそこにいる。しかし、魂が抜ければ、それは肉塊となり、ようやく解体できるのだという。魂を天に還す。日本やアイヌの狩猟にも確かそういう信仰があったはずだ。仕留めた獲物をどう扱うかが次の狩の吉兆を呼び寄せる。遠く離れたアラスカの原野は、そんな生命の循環のあり方を教えてくれた最初の土地だった。

目次

- 1 エッセイ 千字文
カリブーの頭を落とす
赤坂 友昭

特集

カナダ北西海岸先住民の アート、最前線

- 2 ユニークなカナダ先住民のアート
岸上 伸啓
- 4 トーテムポールは変わったのか
立川 陽仁
- 5 口承詩×マンガ
平野 智佳子
- 6 進化する版画
岸上 伸啓
- 8 線を彫る
伊藤 敦規
- 9 バスケットリー2000年
齋藤 玲子

- 10 みんぱく回遊
ひとに、モノに、
「やさしい」展示づくり
園田 直子

- 12 みんぱくインフォメーション

- 14 ○○してみました世界のフィールド
アマゾニアの植物からの教え
後藤 健志

- 16 追悼 田主誠さん
みんぱくと田主誠の版画

- 18 シネ倶楽部 M
太平洋戦争はまだ終わっていない
——「シン・レッド・ライン」
藤井 真一

- 20 ことばの迷い道
うなずき集め
鈴木 英明

- 21 編集後記・次号の予告

表紙

マイケル・ニコル・ヤグラナス作
ハイダ・マンガ『カーブのひれ』(Douglas & McIntyre、2019年)の原画より、海の世界に飛び込んだ主人公カーブに対して、動物たちが自らを文明人と名乗り、ドレスコードを要求するシーン

プロフィール

写真家、映画監督。阪神・淡路大震災を機に、大地に根ざした暮らしを求めて辺境への旅をはじめ。雑誌やメディアに加え、国立民族学博物館の特別展など公共施設へも作品を提供し、国際文化交流プロジェクトのプロデュースをするなど活動は多岐にわたる。日本に残る基層文化を紐解き、自ら監督した宮崎県の間桐部に伝わる星神楽のドキュメンタリー映画「鏡鏡 SHIROMI」が、現在、全国で公開中。

特集 カナダ北西海岸先住民の アート、最前線



アジアからカナダへの西の玄関口であるバンクーバー国際空港。いたるところに奇妙な形の仮面や木箱、木像、トーテムポールとよばれる木柱の作品が……。いったいなぜ空港までもがアートな空間になっているのだろうか。

ハイダ族のトーテムポールの建立(ブリティッシュコロンビア州オールド・マセット、2006年)

ユニークな

カナダ先住民のアート

岸上 伸啓 きじがみのぶひろ
民博教授

豊かな海と森

黒潮に端を発する北太平洋海流は、カナダとアメリカの国境あたりの沖合で北上するアラスカ海流と南下するカリフォルニア海流にわかれる。これらの海流は栄養に富み、サケやオヒョウ、ニシンといった魚類、そしてクジラやアザラシなどの海獣類が多数生息する豊かな海を育んできた。

また、北太平洋から北アメリカ大陸に向かって吹く風によって運ばれた雨雲が、南北に長く伸びる沿岸の山地やロッキー山脈にぶつかることにより、秋から翌年の春にかけて大量の雨をもたらす。このような自然条件が温暖多雨の環境を生み出し、レッド・シーダーやイエロー・シーダーに代表されるヒノキ科、ヘムロックやスプルースのようなマツ科などが生い茂る樹林を形成する。

文化復興を後押し

カナダの太平洋沿岸地域には異なる言語を話す一五以上の民族が暮らしている。それらの諸

民族の文化的特徴が類似しているため、北西海岸先住民と総称されている。豊かな水産資源のおかげで安定した生活を送ることができた人びとは、森林資源を活用した独自の文化を約二〇〇〇年前に形成した。一八世紀後半から二〇世紀半ばにかけてヨーロッパ人やロシア人との毛皮交易、イギリス人による植民地化、カナダ国家による同化の影響を強く受け、急激な社会的・文化的変化を体験した。

一八八〇年代半ばにカナダ政府は、過剰な贈与や消費を伴うポトラッチ儀礼を非文明的であるとして、その実施を禁止した。しかし一九五〇年代初頭に先住民に宗教の自由が認められ、ポトラッチ儀礼の禁止が解除されると、北西海岸先住民はポトラッチやトーテムポールづくりを再開し、自身の文化や言語の復興運動を展開

するとともに、ヨーロッパ系カナダ人社会からの政治的自律をめざした。その文化復興運動の一翼を担ったのが、アート制作であった。一九六〇年代の北西海岸先住民アートには、トーテムポールや仮面、がらがら、木箱などの木彫品、バスケットリー(かご細工)、銀製腕輪などの宝飾品、アジャライト石彫刻品、織物、そして版画があった。これらの作品は個人のコレクターや博物館・美術館からの関心を集め、一九七〇年代には欧米中心のアート市場とは別の北西海岸先住民アート市場が形成された。

アートのなかの生き物たち

北西海岸先住民のアートは、モチーフや表現方法がユニークである。多くの作品に共通するモチーフは、家族集団の紋章となる祖先にゆかりの深い生き物や空想上の生き物、神話や歴史的事件などに因



バンクーバー国際空港の発出口ビー・ビル・リード作の《ハイダ・グワイの精神、ひすいのカヌー》が利用者を迎える(2013年)



儀礼用仮面を制作中のハイダ族の若者(ブリティッシュコロンビア州オールド・マセット、2006年)



シャチャやワシなどが描かれた家屋の壁面(ブリティッシュコロンビア州オールド・マセット、2006年)

それらのモチーフを、独特の表現方法、U字型や卵型、ひとみ型のデザイン形式を用いて木箱や丸木舟の側面に描いたり、木板や木柱に彫り出したりしてきた。生き物の姿は写実的ではなく、特定の身体的特徴が強調されて描かれる。例えばシャチャは一本以上の大きな背びれをもつ生き物として描かれる。ビーバーは、前歯や尻尾の独特な形

で表象される。予備知識をもっていないと描かれた生き物が何であるかを同定するのはむずかしい。わたしたちにはワタリガラスとハクトウワシを判別できないことがある。その一方で、わたしたちにとって想像もできない姿で描かれる生き物は、不可思議で、奇妙であるが、魅力的でもある。

二一世紀に入ると、映画やパフォーマンス、インスタレーション、金属製作品、ガラス製作品、油絵、マンガなどあらたな技術や媒体を用いたアートが制作されるようになった。本特集では、トーテムポールとハイダ・マンガ、版画、銀・銅細工の宝飾品、バスケットリーを紹介し、カナダ北西海岸先住民のアートの魅力、ダイナミックな展開と可能性を紹介する。

トーテムポールは変わったのか

たちかわ あきひと
立川 陽仁

三重大学 教授



北西海岸の先住民は、いったい何のためにトーテムポールを制作するのか。この問いに対する一般的な答えは、次のとおりである。

- ①何かしらの彫刻を施した家の柱や梁はり
- ②家や集落の入口に立ち、来客を歓迎するモニュメント
- ③墓地に立ち、死者を弔う慰霊碑
- ④家族に起こった何かしらの出来事を記憶に残す記念碑

二〇世紀後半になると、観光目的のトーテムポール制作依頼が激増するなど、トーテムポールが多様化したといわれている。観光目的のトーテムポールは右記の伝統的なものとは違う、新しいタイプにも思えるが、見方を変えればそ

うでもない。例えば空港に立つポールは観光客を魅惑しつつ彼らを歓迎するものである以上、歓迎モニュメントとしての意義があるからだ。

今世紀に入って見られるようになった、一見新しいがじつは伝統と連なるポールもある。そのひとつが、二〇一七年、ハイダ族のジェームズ・ハートによって制作され、ブリティッシュコロンビア大学に立っているポールである。ごく最近、カナダでは一九世紀にキリスト教会が先住民の子どもたちのために設立した寄宿学校の跡地で、大量の子どもたちの遺骨が発見された。この事件から、かつて行方不明になった子どもたちの多くがじつは虐待・虐殺されていた事実が発覚した。ジェームズ・ハートのポールは、この痛ましい事件を人びとの記憶に残し、亡くなった子どもたちを癒やし、また加害者である教会や政府との和解のため制作された。

過去にも「癒やし」や「和解」のポールはあっただろうが、それらは制作者の近親者にかかわる事件を記憶に残すためであり、はるか遠い時代の別の場所に住む、顔も知らない「同胞」にあてたものではなかった。その点に限ってみれば、このトーテムポールは新しいのかもしれない。

口承詩×マンガ

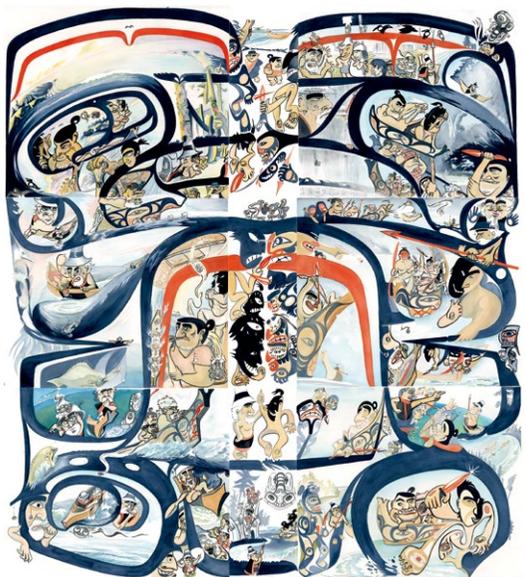
ひらの ちかこ
平野 智佳子

民博助教

ハイダ・マンガは、先住民族ハイダの口承の物語を描いた、新しいジャンルのフルカラー・グラフィックである。それは、ハイダのイメージ世界と日本のマンガを融合させた画期的な作品だ。ハイダ・マンガの生みの親は、ハイダ・グワイ諸島出身のアーティストであるマイケル・ニコル・ヤグラナス (Michael Nicoll Yahgulanaas) である。

二〇一一年、マンガ『二人のシャーマンの物語 (原題: A Tale of Two Shamans)』が皮切りとなり、カナダの外でハイダ・マンガの展示会が催されるようになった。ハイダ・マンガは社会問題や環境問題などのメッセージ性の高い物語を扱っており、そのデザインにも大きな関心が寄せられた。マイケルは、ハイダ・マンガを北西海岸先住民について語られる単純化された物語に対抗するものとして創作し、「アーチャーやマーベルなどの北米コミックに代表されるような入植者の伝統の一部ではない」と語っている。彼は、ハイダの伝統的な物語の複雑さと多様性を表現する手段として、日本のマンガを参考にしたという。

ハイダ・マンガは通常、紙にインクや水彩で描かれるが、富や階級の現代的象徴である自動車のボンネットや、ハイダにとって伝統的な価値をもつ銅板紋章にも描かれることがある。それらは、カナダにあるブリティッシュコロンビア大学の人類学博物館やグレンボウ博物館に展示されている。二〇〇八年にはマンガ『ハチドリ』の飛行 (原題: Flight of the Hummingbird)』が刊行された。この本はアメリカでベストセラーとなり、その後、フランス語、スペイン語など複数の言語で出版された。アニメ版はYouTubeでも公開されている。世界に広く展開するマイケルの創作活動は、ウェブサイトを「Haida x Manga」 (<https://www.haidaxmanga.ca/>) のオンライン展示を通じて、詳しく知ることができる。



マイケル・ニコル・ヤグラナス作
『一瞬の戦争 (原題: War of the Blink)』2006年

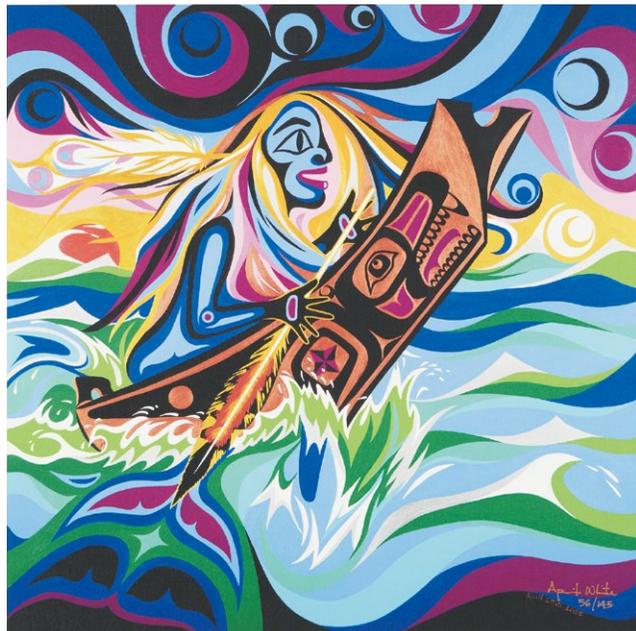


上:
キャンベルリバーにあるホテルの敷地内に立てられたポール。1966年、サム・ヘンダーソンがバンクーバー島のブリティッシュコロンビア州加入100周年を記念して制作。その意味では記念碑的だが、ホテルの宿泊客には歓迎モニュメントとしての意義ももつ (撮影:リーシャ・デービス、2023年)

右下:
2009年、世襲チーフである故ボビー・シウイド氏の功績を称えるためキャンベルリバー博物館前の海沿いに立てられた記念碑的のトーテムポール。伝統的な目的を継承するポール。マックス・チッカイトとリック・シウイド制作 (撮影:リーシャ・デービス、2023年)

左下:
ジェームズ・ハートが2017年にブリティッシュコロンビア大学構内に立てた『和解のトーテムポール』
©UBC/DNA Engineering (撮影:岸上伸啓、2022年)





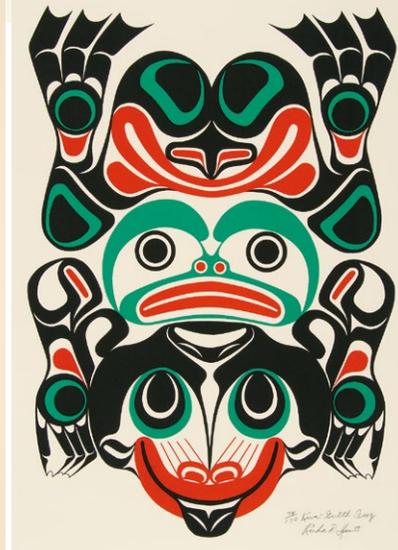
ジークレー版画
エイプリル・ホワイト作《トゥルー・ジャート、カヌー女》2013年
カヌーに乗り精霊の世界に向かう女性を主人公とする伝説を描いた作品

して原画を描き、インクジェットプリンターで刷るといふ、ジークレー版画を制作するようになる。彼ら／彼女らは、従来のモチーフとともに、「スター・ウォーズ」のような映画、オリンピック、環境保全や政治的権利を求めるアイドル・ノー・モア運動なども題材として取り入れた。新しいツールは、より多色で鮮やかな作品の制作を可能とした。アーティストが原画を描き、それを基に専門業者が刷るシルクスクリン版画とは違い、アーティスト自身が版画まで刷るようになった。

こうして二一世紀の今、若い北西海岸先住民アーティストを中心にカナダの現代社会を反映



シルクスクリン版画
フリーダ・ディー・ジンク作《貝の中にヒトを見つけるワタリガラス》1980年
人類の創成神話を描いた作品(H0117705)



シルクスクリン版画
リチャード・ハント作《カエル》1980年
富の象徴であるカエルを描いた作品(H0085641)

進化する版画

岸上 伸啓

民博教授

シルクスクリン版画で本当の芸術を！

北西海岸先住民は、ヨーロッパ人と接触するようになった一八世紀よりもはるか前から各先住民社会に伝わる神話などの口頭伝承や世界観、さまざまな動植物や想像上の生き物、精霊などを自らの家族集団の紋章として描いてきた。すなわち、自らが属する集団の紋章として、祖先とゆかりの深いワタリガラスやワシのような生き物、サンダーバードやシシウトル（双頭のウミヘビ）のような想像上の生き物を、トーテムポールや丸木舟、木箱の側面や家屋の壁面、儀礼用マントに、分割表現方法や対称表現方法など独特のデザイン形式を組み合わせて描いてきた。

一九六〇年ごろにエレン・ニールやダグ・克蘭マーといった若い先住民アーティストが「シルクスクリンで本当の北西海岸の芸術をうちたてよう」と試作をはじめ、シルクスクリンの専門業者に原画をもち込むようになった。初期の版画は、伝統的なデザイン形式を重視し、黒色と赤色を基調としていた。制作をおして、アーティストは伝統的な表現方法やデザイン形式をあらたなモチーフを取りあげる傾向が見られる。しかもコンピュータ技術の発達に伴い、版画のテーマや描き方、色彩も大きく変わった。しかし、この新版画を北西海岸先住民の版画として認めない先住民アーティストや画廊関係者も多い。

だがわたし自身は、新版画には随所に伝統的なデザインや世界観が埋め込まれているため、これも創造的継承のひとつとして考えている。北西海岸先住民の版画は、国内外の社会的な動きと連動しながら、常に進化し続けている。

式を創造的に継承することができた。アーティストたちは、自身の文化を広く世界に伝えるために制作したと語っている。版画は、一作品につき二五〇〜四〇〇枚が刷られ、儀礼用版面のような一点ものの作品と比べて安価で、広く多くの人びとに販売し、流通させることができた。このように版画は、収入源になるとともに、文化を世界に発信する手段となった。

版画ブームの到来

一九七〇年代になると、シルクスクリン版画はブームとよばれるほど、カナダにおいて人気を博し、より多くの作品が作られるようになった。そしてあらたな媒体である版画は、文化の復興と促進において重要な役割を果たし、一九七〇年代末には北西海岸先住民アーティストのあいだで伝統的アートのひとつとして定着した。

時とともに版画は多色刷りになり、さらに、デザインも変更された。また、先住権の獲得や環境保護をカナダ社会一般に訴えるための作品もあらわれた。作品を売って稼いだ金を自治権獲得運動や環境保護運動の資金源とする、ジョー・デイビッドのようなアーティストもあり、版画づくりは政治性を帯びるようになった。「スター・ウォーズ」、オリンピックも題材に

一九九〇年代後半になると何人かの若手アーティストがパーソナル・コンピュータを利用

左：ジークレー版画
アンディ・エバーソン作《持続》2021年
映画「スター・ウォーズ」からモチーフを得て、制作された作品
下：インクジェットプリンターの横に立つ版画家アンディ・エバーソン氏（2023年）



線を彫る

伊藤敦規

民博准教授

わたしはアメリカ南西部先住民の銀細工を専門としているが、それとカナダ北西海岸先住民の銀・銅細工を比較するという異なる特徴が見えてきて面白い。

おもな素材は銀と銅なので類似性が見られるし、独特な表現で描かれるモチーフも神話上の登場人物やクラン（氏族）のシンボルなどで共通する。いずれも使途は装身具であり、観光客やコレクター向けに販売される。両者を比較する場合、もっともわかりやすい違いは

制作技法の組み合わせだろう。

アメリカ南西部先住民のあいだでは二枚の銀板を鑲付けする「重ね合わせ技法」や、細かく加工したトルコ石や珊瑚などを寄せ集める「象嵌技法」、砂型や石灰岩型に溶解銀を流し込んで成形する「鑄造技法」など二〇〜三〇種類の技法が知られている。ホピ民族やナヴァホ民族の銀細工には技法の組み合わせに特徴があるので、それが民族集団独特の様式の一構成要素となる。ただしもちろん銀細工師たちはそうした傾向にとらわれることなく創造力を発揮しながら作品を生み出している。



マイク・セッジモア作 腕輪（銅製）1999年
モチーフの外郭は彫込み技法、背景は鑿打ち技法で表現した（H0219577）

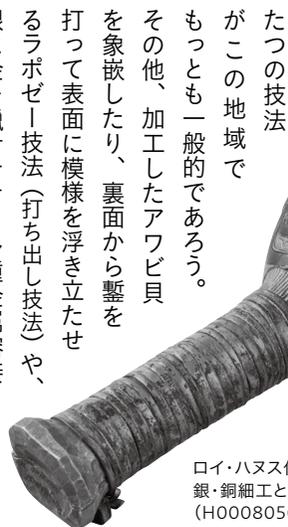


ゴードン・ツワンス作 腕輪（銀製）2000年
背景の一部の格子模様は「クロスハッチング」とよばれる（H0219576）

一方、カナダ北西海岸先住民の銀・銅細工はどうか。例えばクワクワカワクワ民族のマイク・セッジモア（一九六七〜二〇一八年）作の銅製腕輪（本頁左上）は、「彫込み技法」と「鑿打ち技法」の組み合わせだと思われる。おそらくこのふ



ロイ・ピッカーズ作
パドル（櫂）1976年
（H0008055）



ロイ・ハヌス作 ながら（儀礼用具）1974年
銀・銅細工と同様に立体的な線が彫られている（H0008050）

たつの技法がこの地域でもっとも一般的であろう。

カナダ北西海岸の銀・銅細工技法の理解を深めるためには、地元に根づいた木彫の表現様式に目を向けるのが効果的かもしれない。例えばツィムシアン民族のロイ・ピッカーズ（一九四六年〜）が制作したパドル（櫂）（本頁右上）や、オウエキーノ民族のロイ・ハヌス（一九四三〜二〇〇七年）が作った儀礼用のながら（本頁右下）には独特な模様が彫つてある。ナイフや鑿で彫り込んだ線と銀・銅細工の線が似ているのだ。アメリカ南西部では模様を描く場合はおもに糸鋸で切り抜いたり鑿を生皮木槌で打ったりするが、カナダ北西海岸では洋彫り鑿を押す。伝統的な木彫と同じく立体的に線を彫るのである。

バスケットリーニ〇〇〇年

齋藤玲子

民博准教授

北アメリカの北西海岸先住民が暮らす地域は、高緯度ながら温暖多湿で、植物資源が豊富なため、身のまわりの多くのものが植物から作られた。なかでもバスケットリーは、その用途が広く、形状・素材・作り方も多種多様である。

すぐに思いつくのは、ものを保管・運搬するための容器である。編み目をいかしてざるや漉し器として、反対に、水がもれないほど目の詰んだバスケットは、なかに食材と焼けた石を入れ、鍋として用いた。釜のような漁具も作られた。苴のように平面的に編んだものは敷物や間仕切りなどに使われた。帽子や蓑のように身に

着けるものも多かった。

素材は、居住地の周辺で採取できるもののみならず、遠方まで採りに出かけたリ、他の集団との交換により入手することもあった。おもなものは、英語でシーダーとよばれるヒノキ科の樹木やトウヒ、シラカバ、ヤナギなどの樹皮・根・枝、ガマやイグサ、カヤツリグサ、イネ、ユリ科などの草本の葉や茎などで、これら以外にトクサやシダなども、



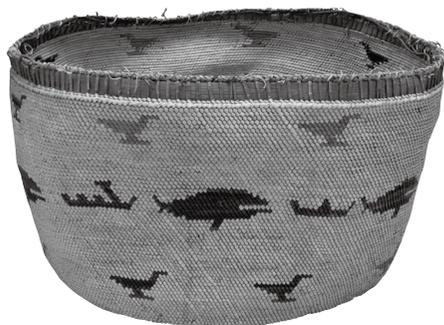
動物がペイントされたトウヒの根製のハイダ民族の帽子（推定）。
明治時代に日本人によって収集されたもの（K0004746）

さらに、現代では、紙や金属（ワイヤー）を素材にしたり、実用ではなくアートとして制作したり、ガラスなど別の素材でバスケットの形と文様を表現した容器を作るなど、あらたな展開も見せている。多彩なバスケットリーの魅力はつきない。



筆者が15〜20年ほど前にアラスカ南東部で買った小物入れ。高価なため、大きいものは手が出ない。上がレッド・シーダー樹皮など、下がイエロー・シーダーで作られている

この地域のバスケットリー利用は、発掘例から二〇〇〇年以上前に遡ることがわかっている。一八世紀になると、探検家らの記録にあらわれ、一九世紀には探検家や交易者らが珍品として求めるようになり、続いて博物館なども収集するようになった。移住者が増えるにしたがい、伝統的な生活様式は変化を余儀なくされ、生活用具も工業製品



上：捕鯨のようすが編み込まれたヌー・チャー・ヌルス民族のかご。レッド・シーダー樹皮、ベアグラス（ユリ科／推定）など3種の素材が使われている（H0076183）
下：展示資料選定のために取り出されたバスケットリー。収蔵庫には、北西海岸地域のものだけでもこの数倍の点数があるが、スペースの関係で本頁掲載の帽子とかこの2点に絞った（2023年）



特別展

「交感する神と人
—ヒンドゥー神像の世界—」

会期 12月5日(火)まで
会場 特別展示館



環境に配慮したガネーシャ像
(撮影：増田大輔、撮影協力：株式会社エスバ)

◆関連イベント
みんなく映画会
「ガンジスに還る」
日時 11月3日(金・祝)
13時30分～16時(13時開場)
会場 みんなくインテリジェントホール
(講堂)(定員350名)
上映作品 Mukti Bhawan/Hotel

Sakavati(2016年)
司会・解説 三尾稔(本館 教授)
参加費 要展示観覧券
(イベント参加費は不要)

※事前申込制(本人を含む2名まで)、
先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本館
2階会場前にて展示観覧券を確認
後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合
のみ当日参加を受け付けます。

■一般受付 10月2日(月)～27日(金)
※友の会先行受付は終了しました。

企画展
「カナダ北西海岸先住民の
アート—スクリーン版画の世界—」
会期 12月12日(火)まで
会場 本館企画展示場

◆関連イベント

「ペーパークラフトで
トーテムポールをつくらう」

日時 10月28日(土)13時～15時40分
(受付12時30分)
会場 本館2階第3セミナー室
講師 本館展示場、前庭(定員20名)
対象 岸上伸啓(本館 教授)
小学生以上(小学3年生以下
は保護者同伴)
参加費 500円(大学生・一般の参
加者は要展示観覧券)
※事前申込制(定員に達し次第受付終
了)、先着順
ワークショップ
「スクリーン版画に挑戦」
日時 11月25日(土)13時～15時50分
(受付12時30分)
会場 本館2階第3セミナー室
本館展示場(定員15名)
講師 岸上伸啓(本館 教授)
対象 小学生以上(小学3年生以下
は保護者同伴)※制作には刃物
(カッターナイフ)を使用します。
参加費 500円(大学生・一般の参
加者は要展示観覧券)
※事前申込制(10月18日(水)10時～定
員に達し次第受付終了)、先着順
◆特別展開連ワークショップ
「まじもの一歩
—やっこみうら—」
日時 10月7日(土)、14日(土)、21日
(土)、28日(土)、11月4日(土)、
11日(土)、18日(土)、25日(土)
13時～16時
(最終受付15時30分)
会場 本館1階エントランスホール
(同時着席最大6名)
対象 6歳以上
(5歳以下は保護者同伴)
※申込不要、参加無料、当日随時受付

◆特別展開連ワークショップ
「絵本の読み聞かせを
楽しもう」

日時 10月15日(日)、11月19日(日)
11時～11時30分、13時～13時
30分、14時30分～15時
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日受付(先
着順)

「点字体験ワークショップ」

日時 10月14日(土)、11月11日(土)
12時～15時30分(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

「陽気な墓」で
想い出を残そう2023」

日時 11月3日(金・祝)
11時～12時、13時～14時、
14時30分～15時30分
(受付は各回開始15分前か)
会場 本館1階エントランスホール
(各回定員8名)
※申込不要、参加無料、当日受付

公開フォーラム

「世界の博物館2023」

日時 11月3日(金・祝)
13時～16時15分
会場 本館2階第5セミナー室
(定員70名)

※要事前申込、参加無料、先着順
詳細はイベントHPをご覧ください。
https://www.minpaku.
ac.jp/ahec_event/
47064



お問い合わせ先
研究協力課 国際協力係
hkasumi@minpaku.ac.jp

受賞

「令和5年度外務大臣表彰」受賞
当館が「令和5年度外務大臣表彰」を受賞しました。本館における、開発途上国の博物館人材育成等を目的としたJICA研修プログラムの長年にわたる実施や、専門家派遣等のJICAが実施する博物館運営・文化財保全事業への協力を通じ、世界中の文化・地域開発事業の底上げに大きく寄与し、日本と開発途上国の信頼関係を深化させている点が評価され、今回の受賞となりました。

「子ども向け観覧支援ツール」が「第17回キッズデザイン賞」を受賞
当館の子ども向け観覧支援ツールが「第17回キッズデザイン賞」を受賞しました。対象は、展示場で子どもたちが迷うことなく、モノをじっくり観察できるような開発された「子どもパンフレット」に「アクティビティ・カード」です。どちらも展示場入口にて無料で配布しているもので、だれでも気軽に手に取っていただけます。

共催展

「九州山地の焼畑文化」

会期 10月7日(土)～12月3日(日)
会場 ヒストリアテラス五木谷
(熊本県球磨郡五木村)
主催 五木村 国立民族学博物館

刊行物紹介

■池谷和信 編
『図説 焼畑の民
—五木村と世界をつなぐ』

千里文化財団
880円(税込)
焼畑農耕と焼畑放棄地での山菜やタケノコ採集や狩猟にも注目し、「焼畑の民」の暮らしの全体像に迫る。



公開講演会

「依存するヒト
—民族・国家・嗜好品—」

人間誰しも何かに依存しますが、マイノリティの依存は特別視されがちです。本講演会では、依存症から国家とマイノリティの関係に迫ります。
日時 11月10日(金)18時30分～20時
40分(17時30分開場)
会場 日経ホール(東京)
(定員600名)

趣旨説明 野林厚志(本館 教授)
講演 松本俊彦(国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所薬物依存研究部 部長、薬物依存症センター センター長)

平野智佳子(本館 助教)
パネルディスカッション
松本俊彦、平野智佳子、野林厚志

主催 国立民族学博物館
日本経済新聞社

【申込期間】
10月5日(木)～11月1日(水)
※事前申込制、先着順 参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます。
※手話通訳あり

お問い合わせ先
研究協力課 研究協力係
06-6878-18209



アポリジニの村の入口に立つ飲酒規制の看板

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名
※事前申込制、先着順、参加無料
※当日参加受付あり(定員80名)

第538回
10月21日(土)13時30分～15時(13時開場)
暮らしの中に現れる神がみ
—現代ヒンドゥー教徒の生活の場から—
講師 三尾稔(本館 教授)

【申込期間】
■一般受付 10月18日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第539回
11月18日(土)13時30分～15時(13時開場)
「北アメリカ北西海岸地域の
先住民アート
—シルクスクリーン版画を中心に」

講師 岸上伸啓(本館 教授)

【申込期間】
■友の会先行予約
10月16日(月)～20日(金)(定員80名)
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付 10月23日(月)～11月15日(水)

みんなくウィークエンド・
サロン—研究者と話そう

会場 本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(イベント参加費は不要)

10月1日(日)14時30分～15時
神になる人びと
—南インド・ケララ州のティヤム祭祀—
話者 竹村嘉晃(平安女学院大学 准教授)

三尾稔(本館 教授)

10月8日(日)14時30分～15時15分
「交感する神と人」の「場」としての
寺院の様相
話者 永田郁(崇城大学 教授)
三尾稔(本館 教授)

10月15日(日)14時30分～15時30分
神がみを演じる—ネパールの仮面舞踊
話者 北田信(大阪大学 教授)
南真木人(本館 教授)

10月22日(日)14時30分～15時
神を飾り、愛でる
—ヒンドゥー神像の衣装選び—
話者 福内千絵(大阪芸術大学 非常勤講師)、南真木人(本館 教授)

10月29日(日)14時30分～15時
パブリック・アートと先住民文化
—北西海岸先住民とアイヌ民族の事例から—
話者 齋藤玲子(本館 准教授)

お問い合わせ 国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form



友の会

お申込みは友の会ホームページ内の受付
フォームをご利用ください。

友の会講演会

参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円

※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第541回 10月7日(土)13時30分～15時
アート制作から見た北アメリカ北
西海岸先住民の社会・文化の変化
講師 岸上伸啓(本館 教授)

アメリカ北西海岸地域に住む先住民の伝統文化は、カナダ政府の同化政策によって19世紀後半から急速に衰退しました。しかし、1951年にボラッチ儀礼の禁止が解除されると、先住民はトーテムポールやスクリーン版画などの制作を通して文化復興運動を推進しました。彼らのアート制作と社会・文化変化の関係についてお話しします。

第542回 11月4日(土)13時30分～15時
有明海のウナギから考える、
生態系の未来
講師 久保正敏(『季刊民族学』編集長、本館 名誉教授)

わたしは中尾勤悟氏による『季刊民族学』(163号、166号)の寄稿に触発され、ウナギが水辺生態系の指標だと知り、水辺の自然

保全の重要性を学び、一冊の本を上梓しました。山から海に至る河川流域での資源の循環に基づく、持続可能な地域社会を目指して、いくつかの地域で実験が始まっています。本講演では淀川流域で進む、天然ウナギ復活をねらった植林運動も紹介します。

田主誠 Museum of Dreams
—みんなくと歩んだ版画家の創作世界—
第1期 10月3日(火)まで
第2期 10月5日(木)～31日(火)
第3期 11月2日(木)～28日(火)
会場 本館1階エントランスホール
※観覧無料

お問い合わせ 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



アマゾニアの植物からの教え

後藤 健志
民博 外来研究員



人類学者は、身体のすべてを使って調査に従事する。このとき自己の身体は、どのような存在として把握すべきだろうか。それは皮膚という境界の内側を指すのか。それとも自己を取り巻く世界を取り込みながら絶えず再構成される過程なのか。後者に妥当性を認めるとして、それでは身体が経験するそれぞれの知覚には自明な境界が存在するのだろうか。筆者はブラジルでアヤワスカ宗教を体験することでこれらの問いに直面した。

アヤワスカとの出会い

アヤワスカとは、学名でバニステリオプス・カールビとプスコトゥリア・ウィリディスという二種類の植物を煮だした飲料で、先住民のあいだで治病や祭祀に用いられてきた。アヤワスカ宗教とは、二〇世紀初頭のアマゾニア



筆者がアヤワスカを初体験したサント・ダイミ教会(ブラジリア、2013年)

でゴム採取人と現地の治療者の接触から生まれた新宗教の総称である。なかでも筆者はサント・ダイミという教団と深いかわりをもってきた。筆者がアヤワスカの知識に最初に触れたのは、民博の中牧弘充名誉教授らによる一連の研究をおしてであり、二〇一二年にブラジリアのサント・ダイミ教

会でそれを初体験するに至った。なお、この教会の設立者フェルナンド代父



アヤワスカを飲んでみました

アヤワスカの製造儀式に参加する筆者(アマゾナス州、2015年)

は人類学者でもあり、民博のプロジェクトにも協力したことがある。アヤワスカは宗教儀礼の文脈でのみ服用される。サント・ダイミの系譜だけでも多くの儀礼が存在するが、代表的なスタイルとして「バイラード」が挙げられる。そこではステップに合わせた聖歌の合唱が長時間に渡って繰り返される。またこれとは別に、アヤワスカを製造するための労働も、それ自体を服用した状態で儀礼として実践される。

共感覚がありふれた現象

アヤワスカは生物医学では「幻覚剤」と定義されるが、その効果は自己の潜在意識がヴィジョンなどの形で顕在化

しい旋律と歌詞に込められた意識への深い洞察は、視神経を介して、変幻自在に変化する鮮やかな幾何学的パターンとして知覚される。

「つながり」にもとづく融和

共感覚に加え、アヤワスカ儀礼では、時間と空間をめぐる認知の変容、自己と他者の人格的融合(憑依)などの出来事が連続的に発生する。これらはいずれも、意識が世界に向ける関心が、自他の「差異」にもとづく分割と統制か

ら、「つながり」にもとづく融和へ転向することと関連する。この状態では、それまで自明とみなされてきた感覚秩序が根底から突き崩され、自己の意識は外界との濃密な接触網へと接続される。混沌や無秩序を想起させる上述の描写からは逆説的に聞こえるが、儀礼の過程における身体が、それとは対極的な実践に従事している事実は特筆に値する。すなわち、ここでは聖歌を正確に詠唱し、規則正しく安定したステップを踏むことが同時に求められている。



20世紀初頭、このプルス川を伝ってゴム採取人はアクレ州一帯に向かった(アマゾナス州、2023年)

この複雑な過程の成就是深い歓喜と充足感を身体にもたらす。

今日の人類学では、「非人間」、つまり人間以外の存在者への関心が高まりつつあるが、多くの場合、人間の意識そのものが非人間的な諸要素から構成されている点に関しては等閑視されてきた。人間の身体が植物などが生産する栄養基盤のうえにのみ存在しうることが自明な事実であるならば、身体に発生する意識に対しても同様の眼差しが向けられて然るべきである。筆者がアヤワスカから授かったこの観点は、世界に関する我々の知識をさらに豊かなものにしてくれるはずである。



右:原料から加熱・抽出され(上)、瓶詰めして保存された(下)アヤワスカ
左:バニステリオプス・カールビ(蔓)とプスコトゥリア・ウィリディス(低木)が植えられた庭園(マト・グロッソ州、2013年)



サント・ダイミによる儀礼の一場面(アマゾナス州、2015年)



田主 誠 たぬしまこと

版画家。1942年京都府舞鶴市生まれ。1969年から現代日本美術展、シェル美術賞展、京展、日本版画展などで入選・受賞。1977年、第12回リュブリャナ国際版画ビエンナーレ展入選(旧ユーゴスラビア)。「月刊みんぱく」の連載「民話の世界」「民族博物誌」や『民博通信』の挿画を担当。著書に『川端少年の歩いた道』、『心の旅 西国三十三所』、『山頭火の風景』など。2023年3月永眠。

「田主 誠 Museum of Dreams——みんぱくと歩んだ版画家の創作世界」を本館1階エントランスホールにて、11月28日(火)まで3期にわたり開催中。

撮影：麻生祥代

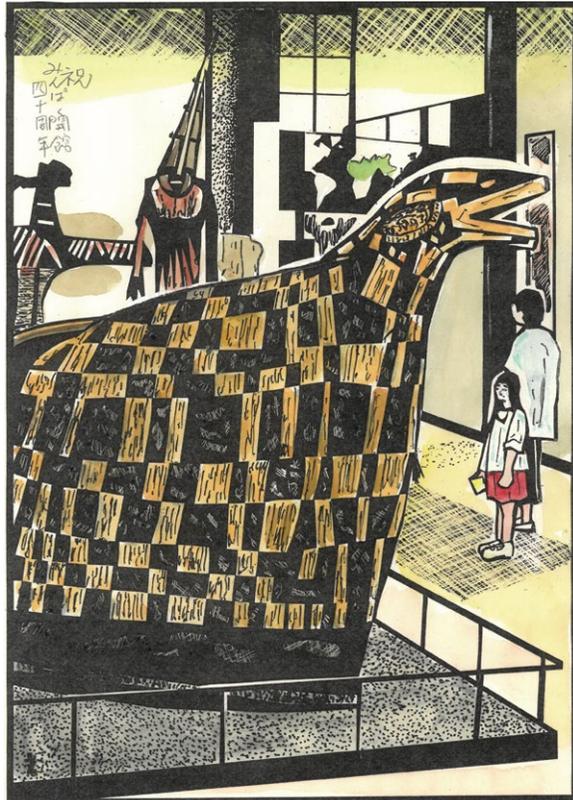


「民話の世界」

『月刊みんぱく』1982年1月号から12年あまり続いた連載「民話の世界」の挿画を担当。民族学者が各地で採集した民話をもとに、想像の世界をふくらませる構図を目指した

「民族博物誌」

『月刊みんぱく』1994年5月号から11年のあいだに115点を制作。題材は日本では馴染みのない動植物が多く、架空の生き物も登場するなど、制作は苦心の連続だったという



アフリカ展示 チェワの仮面 2017年
国立民族学博物館開館40周年を祝って制作



MASK AF 1981年
仮面の正体を造形的な観点から分析したいと思ったのが、仮面の作品に取り組むことになったきっかけであった



水上マーケット ータイー 1996年
みんぱくを退職後、いくつかの国々を訪れ、人びとのくらしを版画にした



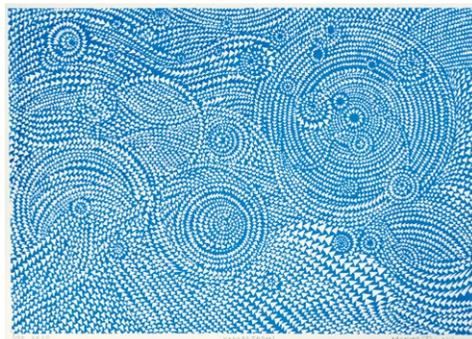
アオウミガメ 1994年 連載第1回挿画



ゴウシュウビャクダン 1997年



ウシ 1997年



KOKOROZASHI 2020年
『新装版 日本の未来へ——司馬遼太郎との対話』(梅棹忠夫編著、臨川書店、2020年)表紙装画のために制作した作品。三角形をテーマにした作品の制作を生涯続けた



装丁・装画の仕事

一般書や絵本のほか、『梅棹忠夫著作集』(全23巻、石毛直道 [ほか]編、中央公論新社)など、数多くの学術書の装丁や装画も手掛けた



お菓子のなる木 1982年 連載第1回挿画

田主誠、という名前を見て本誌読者のなかには、なつかしく思われた方も多いのではないのでしょうか。田主誠さんは本誌で多くの挿画を担当し、遊び心にあふれた木版画や明快な色と線のシルクスクリーン版画で読者の目を楽しませてくれました。一九六〇年代より独学で版画制作を始めた田主さんは、三角形をモチーフとした抽象的な作品で評価されてきました。開館の一九七七年、事務官としてみんぱくに着任されたことが転機となったのでしょうか、展示や事業をとおして世界の民族のさまざまな造形にふれるなかで、民族の心を表現する具象的な作品へと転換していきました。どの作品にも、異文化への驚きや憧れ、人びとへの優しく温かいまなざし、ユーモアに富む人柄がにじみでていきます。みんぱくとともに歩み、表現の世界を広げていった芸術の軌跡でした。

(本誌編集室 小山茂樹)

みんぱくと田主誠の版画

追悼 田主誠さん

太平洋戦争はまだ終わっていない

藤井真一 民博助教

熱帯の島ガダルカナル

ソロモン諸島ガダルカナル島。今から約八〇年前に太平洋戦争の激戦地となった島である。蒸し暑い熱帯の島での軍事衝突は、戦闘による死者だけでなく、マリアのような熱帯感染症による病死者や乏しい兵站による餓死者も大勢生み出した。この映画は、一九四二年八月に始まるアメリカ合衆国軍の上陸と戦闘を描いた作品である。

物語は脱走兵のウィット二等兵が担架兵として懲戒部隊へ引き戻される場面から始まる。アメリカ軍の最初の目標は、日本軍が太平洋戦争の要衝として島の北岸部に建設していたヘンダーソン飛行場を奪取すること。本作で描かれているのは、飛行場奪取後の周辺丘陵地をめぐる激烈な攻防戦である。特に、約一時間におよぶ銃撃戦の場面では、最前線で死に直面する兵士たちの恐怖や葛藤が、真に迫る様子で描かれている。



「シン・レッド・ライン」
発売・販売元：ソニー・ピクチャーズ
エンタテインメント

生まれ育った場所を 戦場にされた人びと

一九四三年二月、日本軍の撤退によりガダルカナル島での戦いは終わった。その後、小説や映画などでこの戦いが扱われてきた。それらのほとんどは、「日本軍から見た」あるいは「連合軍から見た」戦いばかりが取り上げられている。しかし、小説や映画といった物語において重要な役割を担われない「無名戦士」たち、外部からもち込まれた戦争にただ巻き込まれ、生まれ育った場所を戦場に変えられた現地住民たちが大勢いることも忘れてはならない。

ソロモン諸島の男性の一部は、連合軍の後方支援や偵察、沿岸警備のために太平洋戦争にかかわった。ただし、連合軍の一員として日本兵を捕らえたり殺したりした者、死人や怪我人は敵味方問わず助けようとした者、荷役や遺体の焼却に

を負っている」と推定されている。漁獲量を増やすために漁師が不発弾から火薬を取り出すという非法かつ意図的な不発弾利用がみられる一方で、不発弾を見つけた子どもが不用意に取り扱って爆発する事故、調理のための焚き火のせいで地中の不発弾が暴発する事故も後を絶たない。二〇二〇年九月、不発弾の調査に携わっていた外国人二名が暴発により亡くなった。二〇二一年には、わたしの友人親子が食事の準備中に焚き火で暴発した不発弾によって亡くなり、彼の妻も鉄片を浴びて脚に障害を負った。

近年、ソロモン諸島の人びとから不発弾撤去の声が高まっている。こうした声に呼応して、また太平洋地域における地政学的な戦略もあって、二〇二二年一月、ソロモン諸島の不発弾処理に対する約一〇〇万ドルの支援をアメリカ合衆国が発表した。日本もまた約一億円相当の不発弾処理機材などを寄贈している。戦後八〇年近く経つてようやく、慰霊や遺骨収集とは別のかたちで激戦地の戦後処理が始められつつある。

ガダルカナル島を舞台のひとつとした太平洋戦争は、一九四五年八月に「終わった」。しかし、地元を戦場にされた人びとにとって太平洋戦争はまだ終わっていない。



子どもたちとともに急斜面の丘を登る(ガダルカナル州西部、2017年)

左上: 野外博物館に展示されているアメリカ軍艦上戦闘機F4F「ワイルドキャット」の残骸(ガダルカナル州西部、2009年)

左中: 発見された不発弾等が保管・処理される「ヘルズ・ポイント」は民間人立入禁止(ガダルカナル州、2020年)

左下: ガダルカナル島に残された太平洋戦争の遺物(首都ホニアラ、2009年)

従事した者、爆撃や銃撃戦に怯えて逃げ込み仕事に戻らなかった者など、個人の戦争経験はさまざまであった。また、ガダルカナル島北岸部の平原や海岸沿いの集落で暮らしていた人びとの多くは、戦争に巻き込まれるのを避けるため、わずか半年のうちに平原南東の丘陵地へ避難したという。戦後、連合軍が撤退した一九四六年から約一〇年の歳月をかけて元の集落へと徐々に帰還していったことがわかっている。

今も残る不発弾

太平洋戦争はこの島に数々の遺物を残した。戦闘機や水陸両用装軌車の残骸、野砲などのほか、銃身や薬きょう、水筒、ココ・コーラの瓶なども各地に点在している。首都ホニアラと近郊集落には、こうした遺物を集めた野外博物館がある。これらは観光資源となり、野外博物館への入場料などのかたちで現地住民に現金収入をもたらしている。

太平洋戦争の遺物は鉄屑だけに留まらない。日米両軍が発弾は数千発に上り、毎年二〇名以上が死亡または重傷

うなずき集め

すずき ひであき
鈴木 英明
民博 准教授

「うーん、なるほど」

相手の話にうなずくとき、皆さんはどういう身振りをするだろうか。バカなことを聞くなよ、首を縦に振るに決まってるじゃないか。そんな呆れ交じりの声も聞こえてくる類の質問かもしれない。ただ、世界は広い。いろんなうなずき方があるものだ。

インドに初めて行ってまず戸惑うのが、うなずき方である。わたしはほとんど沿岸部しか知らないが、日本でやるような首を縦に振る類の身振りはまず見たことがない。どこでもうなずく際は首を横に振る。振るのであって、日本で否定を意味するときやる首を左右に回す動作ではない。肩が凝っているときにやる振り方が近いが、そんなぎこちなくはなく、もっと滑らかで振り幅も小さい。視線は常に相手に向けられる。視線の鋭さと振りの速さはうなずき手にとってのその話題の関心や驚きの程度によって異なる。内容が当たり前ならば振りは軽やかで、視線も柔らかく、眉毛も振りにあわせて毳のように上下するが、驚くような話題ならば、振りは遅く、いぶかしげに視線も鋭い。

どちらにしても首は横に振られるが、首を縦に振ってくれるのが理解の目印だと思っていると、面食らう。話しているそばから否定されているような気がするのだ。逆もまた真なりで、一生懸命聞き取りをしていると、どうしても首を縦に振って相槌を打ってしまうのだが、それが滑稽だったようで、それをすぐさま周りの子どもたちが真似を始めるのだった。そのうちに、自分でも首を横に振るようになってくる。

アフリカ大陸東部沿岸のスワヒリ世界のうなずき方も独特だ。出くわす頻度はそれほど多くないので、それだけに出会ったときの戸惑いは深く、何か良いものを見せてもらったという満足度もまた高い。最初の出会いはザンジバルの文書館だった。訪問者の世話をいろいろと焼いてくれる閲覧室付きの女性がいて、請求した文書が着くまでのあいだ、部屋に二人きりだったので、いろいろと世間話をしていた。女性がずっとしゃっくりをしているようだったので、「どうしたんだ」とか、「わっ」といって彼女のしゃっくりを止めようと気遣うのだが、向こうは怪訝な顔をする。あきらめて世間話に戻ると、またしゃっくりを始める。おかしな人だなと思っていたが、しばらくすると、それがうなずきであることに気が付いたのだった。

空気を吸い込み、喉のところで止めるとしゃっくりのような音が出る。それがいちばん近い。その後、よくよく現地の人の会話に耳を澄ませば、結構そのしゃっくりもどきが聞こえてくる。人によっては、いびきにも似たような音になることがある。インドの首振りもそうだが、スワヒリのそれも自分なりにサンプルを集めているうちに、真似したくなるうなずき、そうでないうなずきが出てくる。理想のうなずきを追求していつの間にかうなずきを繰り返してしまう。それにふと気が付き、自分で可笑しくなる。

コロナ禍ではあらたなサンプルを集めることができず、たまに誰かにやってみたが、多くは怪訝な顔をし、現地を知っている人はこっそりと笑ってくれた。それを見るのもまた楽しかった。

『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2023年10月号

第47巻第10号通巻第553号 2023年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 島村一平 中川理 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2023年
10月号

編集後記

狩ったカリブーの魂を天に還す! ^{かえ} ^{あかさかともあき} 赤坂友昭さんのエッセイを読んで、わたしが長年かかわってきたベトナム西北部の稲作民タイ族の習慣との比較を考えた。村でわたしも動物の解体には何度も立ち会ったが、家畜にせよ、狩りと獲った獣にせよ、その魂を天に還す儀式は思い当たらない。田畑菜園での生産も、家畜の再生産も、人手なしにありえない農村生活では、極端ないい方になるが、動物の魂も人が増やすのだ。

いっぽう、人のあずかり知らぬところで誕生した獲物に自分の命を預けている狩人には、人も動物も等しく自然の摂理にしたがっている実感がこたさる強いのだろう。獲物の魂を天に還す儀式には、おそらくそんな狩猟者ならではの靈魂観がある。

こうした靈魂観は、本号特集で紹介したカナダの先住民アート^{アト}の基層にもあるのではなかるうか。描かれた動物の身体^{しんたい}のそこかしこに目や顔が宿っていて、それは動物というより、まるで魂そのものだ。そんな世界観を感じに、ぜひ企画展観覧にお越しく下さい。そして田主誠さんの世界も! (樫永真佐夫)



次号の予告 11月号

特集「ニセモノの創造力」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

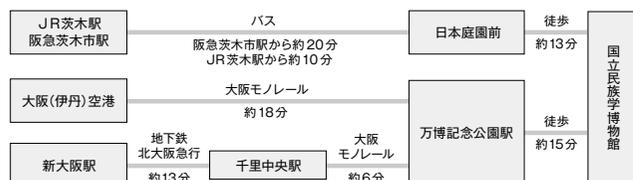
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休日 日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)
年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>

